



▲劉備の墓所に続く小道。雨上がりには紅色がひととき冴える
◀寛子巷の民家。寛子巷には古い街並がよく保存されている

紅と墨の古城

特集

南信之「文・写真」

text & photo : Minami Nobuyuki

成都



古蜀国がこの地を都と定め、名を成都と改めたのは、今から約2500年前のこと。以来、成都は三国時代の蜀、五代十国時代の前蜀など、七つの地方王朝の都として栄えてきた。

成都は天気が悪いことで知られている。これを表す「蜀犬日に吠ゆ」ということわざがある。「蜀の国では日が差すことはまれなため、犬は太陽を見ると怪しんで吠える」というのだ。現在では「無知な者は当たり前のことをも怪しむ」の意味でも使われる。特に初秋から冬にかけての成都は、大雨が降る訳ではないが、ぐずついた天気がつづく。しかし、この湿潤な気候のおかげで成都平原一帯は豊作に恵まれ、古来より「天府之国（天国）」と呼ばれてきたのだから、「天気が悪い」という表現は適当ではないだろう。

古寺に巡らされた塼の紅色、市場で売られる唐辛子の深紅、古い民家を囲む壁の黒色……。どの街にも、その街を代表する色というのがあるように思う。成都の場合、それは紅と墨である。確かに紅色は中華文化圏ではいづこでも好まれる色であるが、墨色がこれほど多く使われているところは珍しい。例えば、成都最大規模の道教寺

院・青羊宮の山門は漆黒だし、三国志の英雄・劉備玄徳の墓碑を囲む壁も光沢のある黒に塗られている。強い日差しの下では紅も墨も色あせて見えるが、雨下のモノトーンの空間では、紅色はひときわ冴え、黒は艶やかに輝く。紅と墨の多用は成都の天気を計算に入れたものに違いない。

近年の成都は「粉紅之都」、「粉紅第一城」などと呼ばれる。ピンクといつても、吉原のような風俗業が盛んな土地、というのではない。粉紅は化粧の紅のことも差し、この場合は特に美人のことをいう。つまり、成都は「美人都市」だという意味だ。

概して四川の女性は広東あたりの女性より大柄な人が多いが、北方の人々に比べて骨格が細くすなりとしている。そして、湿潤な気候のおかげか、きめ細かい白い肌と潤いのある黒髪を誇る。また、その物腰の柔らかさが成都の女性をより美しく見せているようにも思う。もちろん街中美人だらけであるはずはないが、例えば満員のバスの中を見回せば、一人ぐらいは目を見張るほどの美人が見つかる、といった具合である。成都が美人の宝庫であることは事実なのである。





ゆるやかな時の流れ

茶館に暮らす

「この街の人たちは、日がな一日、茶を飲むか麻雀をしている。一体いつ仕事をしているんだろう？」

成都を訪れた北京つ子がこういった。成都同様に悠久の歴史を誇る古都・北京の住人の目にさえ、この街ののんびり具合は異様に映るようだ。

成都には本場に茶館（喫茶店）が多い。茶館といっても、その大多数は軒下や露天営業である。これは、晴天こそまねなもの、大雨の降ることも少ない成都ならではの。路地に入れば竹の椅子と木のテーブルを並べた茶館がすぐ見つかるし、寺の境内や公園などにも決まって茶館がある。大抵の茶館には「一茶一座」と書かれた看板が掲げられているが、これは、「席に座るなら、一人あたり一杯のお茶を注文して下さい」との意味だ。

小さな店なら、椅子に座って欲しいお茶の名前を告げると、店の人が碗と蓋と受け皿が一組になった「蓋碗」と



【右】昭覚寺境内の茶館
【左】峨眉山の竹葉青というお茶。まるやかな味

呼ばれる茶碗のセットに茶葉を入れて持つてきてくれる。蓋碗は急須と湯のみ兼用の便利な茶器である。

寺の境内や公園などのただっ広い茶館なら、まず茶葉を買って蓋碗に入れてもらってから好きな席を探す。あるいは、椅子やテーブルを自分で好きな場所に運んで座ることもできる。席に着くと、薬缶やかんを持って館内を徘徊し



ている給湯係がお湯を注いでくれる。お茶が良い色になったら、水面に浮いている葉を蓋で飲み口の反対側によけながらチビチビと飲む。お湯は何度でも足してもらえが、お茶が半分ほど残っている状態で湯を足すのがコツのようである。そうしないと3煎目あたりには色が薄くなつて、おいしくなくなるからだ。

茶館で売られるお茶のほとんどが緑茶、あるいは緑茶に花の香りを付けた花茶である。四川は竹葉青、巴山雀舌などの銘茶を産する茶所でもある。とにかく、地元の人はいったん茶館

に腰を落ち着けるとなかなか席を立たない。飯を食べに行ったり、雑用を片付けに出かけたりする場合にも、席はキープしておく。客が帰ったと思えば、店員に茶碗を片付けられては困るので、「戻ってきますよ」という意思表示に、蓋碗の受け皿を椅子の上に置いておく。昔は茶館をオフイス代わりに使っていた商人も少なくなかったという。今でも中座したまま3時間も4時間も帰ってこない人がいるらしい。こうなるともはや、茶館に暮らしている、という感じである。

茶館でお茶を飲んでみると、よく臨席の人から話しかけられる。これも中国の他の都市ではめつたにないことだ。成都人は人懐っこく、そしておしゃべりである。平日の茶館はさすがに老人客が大半を占めるが、週末には若者たちの姿も多く見かける。茶館文化が若い世代にちゃんと継承されているのはうれしい事だ。しかし、週末の茶館でも私に話かけてくるのは爺さん婆さんばかりで、妙齢の成都美人とは会話を楽しむのはおろか、袖振りあう機会すらなかった。悲しいかな、しよぼくれたオヤジが相手にされないのは成都も同じであった。

三国志演義の世界

母屋を取られた劉備玄德



【上】 諸葛亮殿

【下】 諸葛亮像

中国で「三国志演義」ほど広く親しまれている物語はおそらくほかにないだろう。2世紀末の後漢衰退から、魏、呉、蜀、三国の覇権争い、3世紀末の晋による全土統一までを描いた三国志演義は、基本的には、歴史書「正史三国志」に沿って書かれているといふものの、正史には記述の無い人物も登場するので、記録小説ではなくフィクションである。

劉備は221年に蜀を建国し、成都に都を置く。成都市の南西の郊外にある蜀の英雄たちが祭られる武功祠は、成都へ観光に来た者ならまず訪れる名所だ。「武侯」とは名軍師として名高い諸葛亮の贈り名である。武侯祠は晋の時代に成都城内に建てられたが、後に諸葛亮の主君であった劉備が祭られる漢昭烈廟の隣に移され、さ



らに、明代に漢昭烈廟の中に取り込まれた。つまり、普通に考えれば、この廟は「漢昭烈廟」と称されるべきなのだ。ところが、中国では諸葛亮は劉備より人気が高いため、いつしか廟は「武侯祠」と呼ばれるようになった。劉備にしてみれば、部下の諸葛亮に軒を貸して母屋を取られた形である。

前庭には左に明の時代に造られた石碑、右に唐の時代の石碑が立つ。そのうち唐代のものは「三絶碑」と呼ばれている。三絶碑という呼び名は、その文章、書跡、石彫の技術のすべてが絶妙である、ということからきたという。石碑には諸葛亮の功績を讃える文章が彫られている。

建物の門をくぐった所は回廊が巡らされた中庭になっており、回廊の左側に武官、右側に文官の塑像がそれぞれ14体ずつ並んでいる。鮮やかな色彩が施されたこれらの像は清の時代に作られたもので、像のモデルはいずれも三国志演義の登場人物たちだ。

中庭を過ぎると次は劉備殿である。中央に劉備の像、左右に劉備と義兄弟の契りを結んだとされる関羽と張飛の像が祭られている。関羽像は勇ましい造形のものが多いが、この関羽像



関羽
張飛同様に劉備の護衛官を務め、やがて將軍となる。呉軍に捕らえられて処刑される。



劉備
黄巾の乱平定に手柄を立てて官職を得る。221年に蜀を建国、223年に病死。



張飛
劉備の護衛官を務め、やがて頭角を現して將軍となる。部下に殺害されて最後を遂げる。

は穏やかな顔つきをしている。

劉備殿を抜けてさらに奥に進んだところが諸葛亮の祭られる諸葛亮殿、すなわち武侯祠の本殿である。諸葛亮とその息子の諸葛瞻、孫の諸葛尚の像が置かれている。また、諸葛鼓と呼ばれる直径50センチほどの銅鑼もある。諸葛鼓の面白いところは、鍋としても使えるという点で、軍隊の遠征時には重宝したという。

諸葛亮殿の裏から左に伸びる小道を進むとやがて左右に紅色の塀が現れる。塀に沿ってさらに歩くと「漢昭烈皇帝」と刻まれ墓碑にたどり着く。ここが、劉備の眠る漢昭烈陵である。墓室は墓碑の後ろの高さ12メートルほどの草の茂った築山のなかにある。

劉備らが心血をそそいで興した蜀も、息子の劉禪の時代にはあつげなく崩壊してしまふ。諸葛亮の息子や孫たちは討ち死にするが、劉禪は魏の軍が成都に迫ると戦わずして降伏し、わずかな領土を与えられて余生を送る。あまりの腰抜けぶりに、武功祠にその像は祭られず、さらに劉禪の幼名「阿斗」は今日でも「間抜け」の意味に使われている。阿斗は自業自得としても、これでは親の劉備が気の毒である。

草笛の音色

唐代の女子樂坊

日中戦争の最中、成都市中で五代十国の前蜀の皇帝・王建の墓「永陵」が発見された。王建はもともと唐王朝の高官で、黄巢の反乱軍が長安に迫った

際、僖宗皇帝に付き添って四川に逃れる。乱は間もなく終結したが王建は地方長官としてこの地に残った。907年に唐朝が滅びると、王建は成都で前蜀建国を宣言して皇帝の座につく。前蜀は王建的死から7年後の925年に建国からわずか18年で滅亡。前蜀は短命王朝であったため、独自の文化は育たず、唐の文化をそのままの形で受け継いだといわれる。

永陵は直径80メートル、高さ15メートルの円形墳で、墓室は前、中、後の3室からなっていたが、現在は部屋を隔てる扉が朽ちたために一続きの広間のように見える。幅10メートル、奥行

きは30メートルほどである。墓室の一番奥に王建的座像が置かれている。帝王の肖像というものは、たいてい正装をして威厳ある姿態に描かれるものだが、王建的像は普段着を身につけており、顔の表情もとても穏やかである。

中の方に据えられた石棺の周りには、いかめしい顔をした半身の武将像12体が配されているが、どれも動感あふれる見事な彫刻である。武将たちは棺を地中から地上に引き上げんとしているようだ。

石棺の側面には女子十二樂坊の先輩ともいえる女性宮廷樂隊の生き生きとした姿が浮き彫りにされている。琵琶、笙、琴、ほら貝、銅鑼、各種太鼓などを手にした奏者22人と踊り子二人の計24人。全員かなりぽつちやりとした典型的な唐美人で、顔にはかすかに笑みを浮かべ、心から演奏を楽しんでいるように見える。

唐代の宮廷音楽は西域諸国や少数民族の音楽の影響を強く受けたといわれ、ここに描かれている楽器にも、

唐の文化をそのままの形で受け継いだといわれる。

唐の宮廷音楽は西域諸国や少数民族の音楽の影響を強く受けたといわれ、ここに描かれている楽器にも、





【右頁】琵琶弾きの彫刻

【右上】王建の座像。高さは1メートルほど

【左上】石棺を抱えるようにして守護する武将像

【左下】踊り子の彫刻。ゆっくりした動きの踊りだったと考えられている



ペルシャが起源の琵琶など、異国から渡来したものが混じっている。

唐から五代十国時代の宮廷楽団の様子が描かれた文物でこれほど完璧に保存されているものは他になく、永陵の彫刻は当時の音楽文化を伝える貴重な資料になっている。

演奏者の中で一人何も楽器を持たずに、ただ口元に手を当てている者がいるので、ひよつとしたら歌い手なのかと思つてよく見ると、指先に何やら小さな布のようなものを挟んでいる。この女性は吹葉、つまり草笛奏者なのだ。草笛にはオレンジの葉が使われたということだ。このころはまだ草笛のような原始的な楽器が宮廷でも使われていたのだな、と思つたが、実は草笛が唐の宮廷楽器に採用されたのはむしろ後期だという。洗練された宮廷音楽に野性味を吹き込もうとしたのではないだろうか。草笛の導入は唐の先進性を表しているように思う。

厳肅な雰囲気他の古墳と異なり、永陵には何やらほのぼのとした空気が漂っている。それは24人の唐美人たちのたたえる微笑みのおかげに他ならない。王建の表情が緩んでいるのも無理からぬことである。

もうひとつの春望詩

失意の女流詩人 薛涛

唐代の詩人・杜甫は安祿山の乱が起こつた際、長安から成都に逃れ、城西の郊外の草堂で4年あまりを過ごした。五代十国時代に杜甫を記念してその住居近くに祠が建てられ、北宋時代には草堂が再建されて「杜甫草堂」と名付けられた。杜甫の遺留品などはいっさい残つておらず、詩史堂などの建物もずっと後になって建てられたもので、あちこちに置かれた杜甫の像もほとんどが近代になって作られたものである。それでも大勢の人が見物にやってくるのだから、杜甫の人氣は時代を超えて絶大である。

唐代の女流詩人では随一と賞される薛涛も成都の南を流れる錦江（現在の府河）のほとりに暮らした。明代から清代にかけ、薛涛を記念して望江楼、浣箋亭などが建てられ、中華民国時代に望江楼公園として一般に公開された。薛涛が竹を好んだということで、園内には150種の竹が植えら

れている。公園の名の由来にもなった望江楼は、当初、崇麗閣という名だったが、塔が錦江のほとりにあつたので、いつしか望江楼と呼ばれるようになったという。残念ながら、塔の上から望む今日の錦江は、河岸をコンクリートに固められた都市の川である。

望江楼の近くに井戸があり、薛涛がその水で紙を漉き、詩箋を作つたといふので「薛涛井」と呼ばれている。紅色の詩箋はたいへん美しく、時の文人たちがこぞつてほしがつたといふ。


薛涛は770年に成都で生まれ、14歳の時に官吏であつた父を亡くすと、生活苦から楽妓となる。楽妓とは日本ではいへば芸者のようなものである。売れっ子となつた薛涛の噂を聞いた劍南節度使（四川一帯の総督）の韋皋は、薛涛を公館での宴会に呼び寄せる。この時、薛涛の美しさと詩才に感嘆した韋皋は、宴が催されるたびに薛涛を招くようになったといふ。



【右上】杜甫の草堂。意外に大きな家である
【右下】薛涛がその水を使い詩箋を作つたといふ井戸
【左下】薛涛の肖像

【左頁】錦江対岸から望江楼を望む





薛涛に入れあげた韋皋は朝廷に彼女を校書として取り立てるよう進言しようとした。校書というのは典籍を扱う官職で、今日の司書に当たるが、当時は博学の者だけに与えられるたいへん名誉な職であった。遣唐使・阿倍仲麻呂は科挙のなかでも超難関の進士に合格するが、最初に就いた職は洛陽の校書である。このことから校書のステイタスがどれほど高かったかがうかがえよう。

それにしても、いくら才があつたとはいえ、なじみの芸者をこのような重要な役職に推そうとするとは、職権乱用とも取れるが、このことは唐王朝がいかにか開放的な政権であつたかを証明する逸話ともいえるだろう。

部下の進言を聞き入れ、韋皋は薛涛を推挙するのを思いとどまり、薛涛は校書にはなれなかつたが、以来、人々は彼女のことを「女校書」と呼ぶようになったという。韋皋は転任で成都を去るが、後に節度使に就いた者たちは皆、何かしら薛涛と交流があつたといわれる。このように薛涛は社交界の花として華やかな生活を送つたわけだが、ついに家庭を持つことはなかつた。春望詩といえば、「国破れて山河在

り、城春にして草木深し」という杜甫の詩がまず思い浮かぶが、薛涛もまた五言絶句四首からなる春望詩を残している。

40歳を過ぎた薛涛は長安から派遣された10歳以上も年下の監察御史（地方を巡り、役人を取り締まりる官職）と愛し合うが、帰任によりその恋は終わりを告げたという。春望詞はその失恋の痛みを詠んだものだといわれる。薛涛の春望詞のなから、通称「同心草」として知られる第三首を記す。

風花日將老 風花日に將まよに老いんとす
佳期猶渺渺 佳期は猶なほ渺渺たり
不結同心人 同心の人と結ばず
空結同心草 空しく同心草を結ぶ

この後、薛涛は現在塔がある辺りの庵いおりで隠遁生活を送り、65歳で世を去つた。彼女の墓には、劍南節度使・段文昌の贈つた碑文「西川女校書薛涛洪度之墓」が刻まれた。薛涛はあの世でやつと校書になれたのである。

薄墨を吹いたような夕闇が辺りを包むと、コンクリートで固められた錦江の眺めさえも、薛涛を偲しのぶにふさわしい詩情あふれる景観に変わる。■